

わが國近世の運命悲劇

小島，吉雄

<https://doi.org/10.15017/2556552>

出版情報：文學研究. 33, pp.133-143, 1943-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



わが國近世の運命悲劇

小 島 吉 雄

伊勢音頭といふ狂言を、わたくしは好まない。九人斬の場面が、あくと過ぎて不愉快だからである。ところがどうした廻りあはせか、わたくしは、雁治郎の福岡貢を

何遍か見てゐるのである。初めて見たころは、勉強心と

雁治郎に對する敬意とで、最後まで神妙に觀おほせたも

のであつたが、見ることの度重なるにつれて、この殺し

場にはひるところで、わたくしは中座して廊下に出るの

を常とするやうになつた。雁治郎の藝が巧緻で、且寫實

的であればあるほど、その殺し場は、ただむごたらしい

ばかりで、正視するに堪へきれないのである。總じて歌

舞伎の殺し場は、必要以上に慘酷な場合が多い。しかし

また或るものには舞踊化があり、あるものには芝居があつて、觀客はそのために餘程救はれることもあるのである。だが、伊勢音頭には、さういふ救ひがない。

伊勢音頭は、所謂際物劇である。従つて、脚色の上にも杜撰なところが多い。例によつて、お家騒動と刀の詮議とが、この劇の骨子ではあるが、その詮議の的である刀が、青井下坂といふ、主人公の福岡貢の一家にとつては、祟りのある刀なのである。すなはち、この刀の祟りといふことが一つの劇的契機となつてゐるのであつて、その點では些か注目すべき劇なのであるが、而もその特色ある條は、近松門左衛門の長町女腹切といふ淨瑠璃劇

の模倣である。

長町女腹切は、外題年鑑に元祿十三年正月興行とあるので、近松世話物の嚆矢と言はれて來たものであつて、今でも戯曲方面に疎遠な人の間には、間々近松世話物の初作としてあげつらはれてゐることがあるが、既に高野辰之博士の歌舞音曲考説にその間違ひである所以が立證せられて以來、諸家の研究によつて、大體、正徳二年頃の上場であらうといふことが、今日の通説である。正徳二年といへば、近松歿年の享保九年より十二年前、また世話物の初作曾根崎心中を書いてから十年目になるからこの淨瑠璃は、その筆の最も圓熟して來た頃の作だといふことが出来る。近松世話物の常として、上・中・下の三段組織であつて、上巻は、京都下立賣堀川の刀屋石見某の内の場、石見の手代半七の深く言替した石懸町井筒屋の遊女お花が、半七の伯母に化けて半七に會ひに來る。すると、そこへまた本物の伯母が、大阪から訪ねて

くる。この眞偽兩人の伯母の鉢合はせて、危くお花の化の皮が剥がれ、半七が主人から打ち打擲の難儀に遇はうとする、そのところを、本物の伯母がお花を自分の妹だと言ひつくりつて、その場の危機を救ふ。さて、この實の伯母が今日訪ねて來たわけは、伯母婿が得意先のさる藏屋敷から信國の脇差の拵へを依囑せられ、それを甥の半七の働いてゐる見世に誂へようためである。ところでその伯母が、半七お花の兩人に向つての物語によれば、半七の家は元は武士であつて、半七の祖父猪瀬文平は伊勢亀山で百五十石の知行取、同じ家中に高木宮内といふ八百石取る旗頭があつて、二人は無二の友達であつたが或る時上方から刀賣りが來て、この信國の脇差を三百貫の折紙付で賣らうといふ。二人ともほしいと思つたが、心安さの座興から高木が文平に「お身の身代では高いものぢやがお買やるか」と言つたのが元で、それが國中の評判となり、「猪瀬が齒も立たぬ双物ずきして知行の高い

高木殿と張合ひ、人中で恥辱を受け、あれでも武士か」と言ひはやされ、どうともしてこの刀を買はねば文平の男が立たぬこととなり、武具馬具衣裳夜着まで賣拂つた二百拾兩の金でこれを買求め、高木に勝つといふ心で中子に「風」の一字銘を彫りしるし、九月十五日の登城の道で待受けて、高木を尋常に討ち果し、そして自分もその刀で切腹、それから一家は浪々の身の上となり、憂き艱難の末、半七の父もまた三年後の同じ月に病死、その悲しみのため半七の母もまた續いて歎き死に、あとに残るは伯母と半七ばかり、三年に三人まで同じ月に死ぬといふことに不審を立て、刀の相性を目利きして貰つたら、火性の者にとつては實に不吉の協差で、これをこのまま持つならば三代は祟るといふ占方に、伯母は驚いてその刀を捨賣に賣放したが、廻り廻つて十三年目、今またこの協差が伯母の手に觸れ、半七の目に觸れることになつたと思ふと、もう半七は實伯母一件で親方から打擲

に遇ふ、これも刀の祟りだと思はれる、といふのである。さて、この長い因縁話にやがて日も暮れかかり、伯母は半七お花をあとに残して大阪へ歸つてゆく。——以上が、長町女腹切上の巻の梗概であるが、伊勢音頭の二幕目に、これがそのまま應用せられてゐるのである。一體伊勢音頭の主人公福岡貢は養子の身の上であるが、その實家の故主今田萬次郎は阿波の殿様から青井下坂の銘刀詮議を命ぜられ伊勢の國に滞在するうち、古市の油屋の遊女お岸に馴染んで、切角手に入れた下坂をば實に入れてしまふ。萬次郎をさういふ破目に陥れたのも、實は、阿波の殿様の伯父大學の策謀であつて、この伯父がお家横領の底意から下坂の刀が萬次郎の手に入るを喜ばず、自己の腹臣徳島岩次等を伊勢に入り込ませ、萬次郎からその刀を横取りすべく暗躍させてゐるのである。福岡貢は、すなはち、萬次郎を惡人の術中から救ひ、下坂の刀を手に入れて一日も早く歸參せしめようと肝膽を摧いて

ゐる。第二幕は、その福岡貢の家へ、伯母のお峯が下坂の刀を持つて來て、その刀が貢の物になる場面であるが、先づ、地方の講中から太々神樂の奉納せられてゐるところで幕が明くと、そこへ萬次郎の馴染女油屋のお岸が貢に會ひに來る。貢は、家内への遠慮からこれを伯母に仕立てて面談してゐるところへ、生憎なことに、本物の伯母が訪ねてくる。そこで、貢の難儀となるので、實の伯母はお岸を自分の腹がはりの妹といふことにしてその場をとりつくろふ。すべて、この邊は長町女腹切をつくりである。それから、伯母は、持參の下坂を取出し、お岸貢にその刀にからまる貢一家の因縁話をする。その因縁話がまた言葉の端々まで長町女腹切のまねである。尤も、貢の祖父が青井刑部、その相手が千石取の濱田十平、切腹の日附が五月四日、刀の燒きは土性で持主の方は水性とある點などが違つてゐるが、刀の作者が彼は信國、これは下坂となつてゐるから、これ位の相違は當然であら

う。伯母の物語では、青井下坂といふ銘は、青井刑部が自分の姓に因んで名づけたのだとあるが、作者は恐らく青江下坂を訛傳したか、もしくは故意にもじつたかであらう。青江下坂は不吉な刀として、ある時代にはひどく嫌はれたものである。長町女腹切では、中の卷で、半七が女のために、伯母から預つた信國の刀を當時の廢り物下坂に摺りかへ、その信國の方は賣拂つて、賣りへぎ二十兩を着服し、下の卷では、半七の刀のすりかへから、伯母婿に難儀がかかり、そこで、伯母は一切の責を身に負うて、そのすりかへられた下坂で切腹する、といふことになつてゐるので、伊勢音頭の青井下坂といふ名も、多分これから思ひついたのであらう。元來、貢の伯母は、金貸金兵衛からこの刀を譲受けて貢のところへ持參したのであるが、代金を拂つてゐない。金兵衛は伯母の後を追うて來て金の催足をする。伯母は金を持たない、金兵衛は伯母を詐欺師呼ばはりして責める。丁度その折

節、貢の養家先の悪人どもの悪企みで、太々神樂の包金百兩が盗まれ、その盗み手の汚名を貢に着せようとするすなはち、伯母甥双方に災難が一時に降りかかるわけであるが、この時の貢の述懐に「ヘテ思ひがけもないこの場の災難、これといふも子孫迄も刀の祟り」といふ言葉がある。かういふ條りなども、やはり近松から示唆を受けたのであらう。その證據に、この刀の祟りはこの第二幕でだけ特に強調せられてゐて、そののちは劇的發展の上に重要な役割を演じてゐないのである。勿論、油屋の九人斬を五月四日の夜の出来事とし、貢は下坂の刀とは知らずして而もその下坂の刀でもつて人を斬り、翌五月五日の端午の節句にはその同じ刀で切腹するのであつて、恐らく作者の意圖では、貢の祖父が下坂の刀で人を斬り自分も切腹したのが五月四日であり、父や母が死んだのも五月四日であり、またその下坂が子孫に迄祟るといふ話等と右の出来事とを關聯せしめて運命の魔力を讀者に

印象づけるつもりだつたのであらうが、一方では、また事件の運びを努めて自然的、合理的ならしめようとし、

殺人や切腹にも心理的必然性を附與し、超人間的な魔力の介在する餘地を乏しからしめる脚色方法をとつてゐるため、その五月四日とか下坂の祟りとかは悲劇の成因としては、まことに影薄き存在となり終つて、刀の祟りが劇的契機として充分活用せられてゐない結果を示してゐるわけである。長町女腹切では、祖父をも切腹せしめ父をも死なしめたその刀がまた半七が犯罪の原因となるのであり、更に伯母の切腹といふ最後の破局も、その時の言葉に「本のは信國、これは下坂、作はかはれど焼刃寸尺一對なれば、一家に祟るは同じこと、伯母さへ死ぬれば科は一人に極つて、脇差は上り物、外に御詮議は残るまい、双物の祟りも三代すむ」とあるから、やはり刀の祟りに關係づけられてゐるのである。それに比べると、伊勢音頭の脚色上の杜撰さが目立つのであつて、模倣は

いつも本物に及ばない。

刀の祟りを取扱つた劇は、近松の作中でも希有であつて、先づはこの長町女腹切ぐらゐるものであらうか。當時の狂言本などにも見當らぬやうである。

刀の祟りを取扱つた劇としては、最もよく知られてゐるのは默阿彌作るところの縮屋新助であらう。これに出てくるのは村正の脇差であるが、これは、そのあるところ必ず血を見ざれば止まぬといふ呪はれた業物である。近松のや伊勢音頭の刀は、特定の所持者にのみ祟りをなすと言はれるのであるが、この村正は誰が持つても祟りがあるのである。作者は、作中の色々の人物をして幾度となく「血汐を好むと取沙汰せられる村正の祟り」といふことを言はせてゐる。濱田宗次郎と宗之助の兄弟二人が三年経たぬに、同じ村正の刃を以て切腹するのであり、縮屋新助がこの村正を手にするや否や、忽ち刃の祟りで狂氣して誰彼の差別なく斬殺するのである。默阿彌の劇的構成

力は優れてゐて、先づ、新助が美代吉に突出されて人殺しをしようといふ心を起す過程を極めて克明に合理的に描いて行く。そして、縮屋宿の六兵衛の意見で彼の自制心が甦り、殺人を思ひ止まる。一旦は思ひ止まつたけれども、村正の刀を見ると、再び殺人の心が萌し、その村正の祟りで全く自制心を失ひ、滅多無性に斬つて廻るのである。濱田兄弟がこの村正で自殺したといふ事實も、つまりは、この村正の祟りを強調し、新助が村正を見ると狂氣するといふ點を効果的ならしめようための伏線に外ならない。刀の祟りを超人間的魔力としてその作中に取入れたのは、默阿彌である。

刀の祟りを超人間的魔力として描くためには、伊勢音頭は描き損ねてゐるといふことは、前に述べた。また、近松の長町女腹切では、刀の祟りは半七の伯母の運命觀として描かれてゐるのであつて、近松の運命觀なのではない。近松自身は人生を支配してゐる超人間的魔力とし

ての刀の祟りを描かうとしたのではなく、ただ人生の偶然性を刀の祟りと解釋しようとする人物を描いたまで

のことであつて、悲劇の原因は作中人物の性格に置かれてゐる。これに比較すれば、默阿彌の方では刀の祟りは今も言ふとほり超人間的な不可抗力として取扱はれて

をり、新助の劇的破滅はこの不可抗力に原因してゐるのである。海外の文學については、わたくしはまことに

疎いのであるが、聞くところでは、獨逸浪漫派の末流

ウエルネル・フーワルトの徒に運命悲劇と稱するものが

あつて、悲劇の成因に人間の自由意志を認めず、運命といふ超自然的威力によつてのみ専ら悲劇の原因を説明しようとし、好んで咒咀とか祟りとかを重んじたといふ。

もし、かやうに悲劇の成因を人物の自由意志に關係づかず、超自然的威力にのみこれを求めるのを運命悲劇と名づけるならば、默阿彌の縮屋新助は運命悲劇的傾向を帶び、近松の長町女腹切はなほ性格悲劇の部類に屬するも

のと言はなければならぬ。

・獨逸の運命悲劇では、運命の魔力を強調するために、きまつて近親相姦や骨肉殺害やを持出してくるさうである。縮屋新助の美代吉殺しにも、刀の祟りの外に、近親相姦と骨肉殺害との問題がある。新助が殺人を犯すまでに惚れ抜いた藝者美代吉は、彼が少時別れた實妹お美代であり、長らく尋ねもとめてゐたその人であつたのである。尤も、美代吉は新助に身を許してゐないから、事實上の近親相姦にはなつてゐないけれども、やはり近親相姦の一變形ではあり得よう。近親相姦を取扱つた劇は既に近世初期から存在するが、近世初期にあつては、事實上は血縁者でないか、もしくは血縁者であつても夫婦の枕を交さぬうちに血縁者たることが判明するか、いづれにしても近親相姦の一步前で救はれるやうに趣向せられてゐるものが多い。近松の作だと言はれる元祿初期の今源氏六十帖といふ狂言などは、近親相姦を作中に取入れ

たものとしては早期に属するものであるが、これは實際は兄妹ではなくして、兄妹だといふのは反對派のこしらへ事であつたといふのだから、悲劇といふよりは寧ろ喜劇的内容といふことが出来る。また同じ近松の津國夫婦池といふ、これは淨瑠璃にも歌舞伎にも作られてゐて、運命劇的成分を多量に有するものとして有名であるが、やはりその中に兄妹夫婦といふことが分つて自責の念に堪へず男女二人は死に行くといふ趣向を立ててゐる。しかし、これもその父親の懺悔によつて本當は兄妹でないことが知れ、二人は死なないで済むのである。これらは近親相姦といふことを取りあげながら、運命悲劇を構成しないものであるが、時代がもう少し降つて中期以後になると、本當の近親相姦が現れてくる。享和元年大阪中座で上演せられた「名作切籠^{むしやくこのかまど}曙^{あけぼの}」の樽屋おせん^{おせん}の如きは、これは明らかに兄妹相姦で、而もおせんはその悲戀のために戀の仲介者であつた伊助といふ男に斬り殺され

るのである。更にまた默阿彌の閻魔小兵衛に至つては、若草と伊之助とは双兒の兄妹であり、心中までしようといふ間柄であるが、二人は、兄妹といふことを知らない。また、實父の小兵衛は實子と知らずに百兩の金をこの二人からゆすり取るばかりか、二人を殺さうとさへする。結局三人の大立廻りとなり、三人共に手疵を負うた揚句に、親子兄妹といふことがその血の一つに寄るのによつて分り、若草伊之助は兄妹相姦の畜生道に陥つてゐたことを知り、また實父を斬つた身の因果を歎き、自害して果てる。かういふ實に因果とも惡業とも言ひやうのない内容となつてゐるのである。

骨肉殺害も近世初期から屢々劇に仕組まれてゐる。誤つて實父を殺したもののや、わが子と知らずして實子を殺した場合など、さまざまであるが、いづれも偶然が生む悲劇といふ點で一致してゐる。但し、この場合も、近世初期の芝居ではかういふ偶然は、ただ單に觀客の意表に

出る脚色上の技巧として利用せられることが多く、運命の積極的威力を強調する意圖に出てゐないので、従つて運命悲劇としての成分は稀薄である。ところが、だんだん時代が後になるにつれて、この骨肉殺害が、他の、たとへば近親相姦とか惡業の報いとかいふものと結びつけられて、運命の超自然的威力を積極的に描くやうになつてゆく。

總じて、以上の諸例でも推察せられるやうに、運命もしくは因縁といふものの超人間的魔力を悲劇の成因とする所謂運命悲劇的要素は近世初期の作品には稀薄であつて、中期以後、殊に寛政以後の戯曲に於て濃厚にあらはれ、默阿彌の如きはその頂點に達したものと云ふべきである。蓋し、默阿彌に於ては、わが國に於ける運命悲劇のあらゆる型式が生かされてゐる。

聞くならく、獨逸の運命悲劇には一定の型があつて、場面はいつも人里離れた凄寥たる一軒屋であり、そして、

主人公の運命は何らかの形で豫言せられてをり、主人公は不吉な豫感に戦きながらも、それを避け得ないで、遂に運命の不可抗力の犠牲となり終る。ところが、作者は、主人公の不安を強調し、凄愴の氣分を強めるために、種種の手段を弄して、たとへば、暴風雨を襲來させたり、壁にかけた時計に逢魔が時を示させたり、時には一家を呪ふ幽靈を出したりするのだといふ。すなはち、運命悲劇には怪談的要素が多量に盛られてゐるのである。曩にあげた閻魔小兵衛や縮屋新助のやうな、わが國の運命悲劇には、さやうな怪談的要素がない。しかし、「新累女千種花嫁」のやうな因果物語劇になると、これは怪談的なのである。千種家の妾が中小姓の權之丞と不義の嫌疑でお手討となり、その秋草模様の小袖が與左衛門の娘累の手に入る。ところが、その小袖には妾の怨みが籠つてゐるので、その祟りと與左衛門が十七年以前に女房を殺した鎌で替女を殺して三十兩奪つたその報いで累は顔に

大火傷を負ふ。さきに千種家の妾が不義の相手であつた權之丞はその後浪人して圖らずも累の入婿となり、與左衛門の名跡を繼ぐが、累の嫉妬の烈しさに、われ知らずあの曰くのある鎌でこれを殺害する。やがて累の怨靈にその身も取殺される。かういふつまり一種の怨靈物なのであるが、これなどは過去の惡業が惡業を生み、その惡果として遂に身を滅ぼすのであつて、やはり一種の運命悲劇には相違ない。しかし、ここに描かれる運命は、閻魔小兵衛や縮屋新助に描かれる運命とは趣を異にしてゐる。彼にあつては、すべて偶然が人生を支配する偉力を具體化したのであつて、刀の祟りといひ、近親相姦といひ、いづれも偶然の運命化である。然るに、これにあつては、すべて佛教的な因果應報の道理を以て悲劇の根據を明瞭ならしめてゐるのであつて、決して人生を支配する偶然の威力といふやうなものではないのである。因果物語劇もしくは怨靈劇は、所謂運命悲劇と相似の點も尠

くないにかかはらず、しかしその根本的には性格が相違してゐるのである。わが國の運命悲劇は、淒愴の情調を増すための怪談的舞臺技巧に乏しい。そして、獨逸の浪漫劇が盛に使用してゐるといふ咒咀とか夢とか不吉の豫感とかは、わが國では因果劇怪談劇に盛に利用せられてゐる。但し、因果劇怪談劇には決して盲目的な運命の威力に翻弄せられる人生が語られてゐない。あらゆる災厄は必ず罪過に對する應報なのであり、必ず善人榮え惡人滅びる因果の常道が展開せられてゐるのである。そして悲劇の發生は、必ず主人公の性格と惡業の報いとの二方面から説明せられるのである。

なほ、わが國の運命悲劇では、骨肉相姦や骨肉殺害は凡て過去の事實でなしに、作中に於て起る出來事として取扱はれてをり、また、主人公はその身の偶然に犯した罪過を決して運命の所爲にのみ歸せしめないで、必ず自己の責任としてその罪を背負ふことを忘れない。もちろ

ん、是非もなきその身の不運を歎き、前世の因果を悲しみはするけれども、それがために自分の犯した罪科に對

する責任をば回避しないのである。このことは、恐らくわが國民性に由來する特徴であらう。